

# Fresh Concert CMDJ 2012

～より豊かな音楽の未来をめざして～



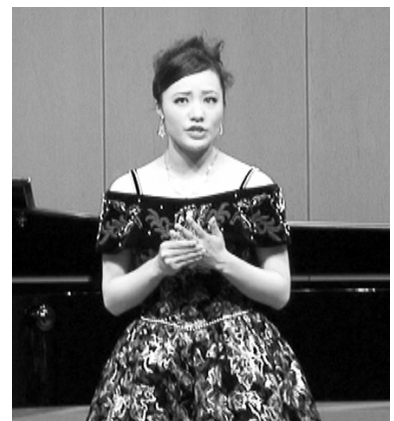
開演前に撮影した演奏者および関係者の集合写真



①原田 智代 (ソプラノ)



②山上 由布子 (ピアノ)



③箕浦 綾乃 (ソプラノ)



④城 佑理 (ソプラノ)



⑤粟津 惇 (ヴァイオリン)



司会の西山 淑子氏



⑥金管五重奏 〈左より高荒海, (TP-1)、三嶋雪音(TP-2)  
高橋秀和(Tuba)、古田龍平(Hor)、青木昂(Tb.)〉



⑦柏木沙友里 (ソプラノ)



⑧林 聡子 (ピアノ)



⑨三井 清夏 (ソプラノ)



⑩小林 啓倫 (バリトン)

《伴奏者》



神原 あゆみ (①)



永井 英里香 (③)



齋藤 亜都沙 (④、⑦)



岡本 知也 (⑨)



三品 萌梨絵 (⑩)



ステージに飾られた花

# 音楽の世界

## 目次

<b>グラビア</b>	Fresh Concert CMDJ2012		
<b>論壇</b>	秋の月は美しいか	助川 敏弥	4
<b>特集</b>	座談会【西洋近代文化史と日本】		6
	小宮 正安 高橋 通 中島 洋一		
<b>長期連載</b>			
	<b>音・雑記一ひなの里通信一</b> (48) . . . . .	狭間 壮	16
	<b>名曲喫茶の片隅から</b> (29) . . . . .	宮本 英世	18
	<b>音盤奇譚</b> (34) . . . . .	板倉 重雄	20
<b>新連載</b>			
	<b>私とラジオドラマ</b> (1) . . . . .	助川 敏弥	22
<b>コンサート・リポート</b>	Fresh Concert CMDJ 2012		24
<b>訃報</b>	畑中良輔／ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ／吉田秀和		28
<b>コンサート評</b>	<b>作曲部会作品展</b>	西 耕一	30
<b>短期連載</b>			
	明日の歌を (第六回-4) 今井 重幸 その 4	橘川 琢	32
	福島日記(10)	小西 徹郎	36
	CMDJ 会と会員の情報		38
	楽譜出版部からのお知らせ		41

## 秋の月は美しいか

作曲 助川 敏弥

六月、新緑の季節に、秋の月の話は時期はずれだが、これは、作家、司馬遼太郎さんの論説に出てくる言葉である。司馬さんは、ここで民族性について論じている。ある民族の、意識、考え方、ものの見方、趣向、美観、というものは永遠不変のものではない。それは時代とともに変るものだ、司馬さんはそう説く。そして、「秋の月は美しい」という美観も、かつて中国文学から来たもので、縄文時代の日本人にはそういう美意識はなかったろうし、いまの若い世代の日本人にもないだろう、アメリカ人にもないだろう、と論じている。

民族と民族意識。これは私たち創作を仕事とするもの、特に作曲の仕事をする者にとって重くのしかかってくる事柄であった。かつて、バルトークに心酔した私たちの世代は、日本の民族性は重い課題であった。音楽では特に、私たちの仕事である音楽が西洋渡来のものである故に、西洋の模倣ではなく、日本と日本人独自の特性を持った音楽を創造することを目標にしなければならない、こういう目的意識とあってよいものがあつた。バルトークだけでなく、少し角度は違っても、ストラヴィンスキー、プロコフィエフなどにも西欧音楽に対するロシア音楽の民族的独自性を対峙させる特性があつた。西洋音楽が中央ヨーロッパ、イタリア、ドイツ、フランスで先進的に繁栄したので、ヨーロッパでも周辺の地域では新興勢力としての自己主張の根拠があつた。

私たちが若い頃、ある雑誌の座談会があつた。清瀬保二さんと、当時の次世代である柴田南雄さんと入野義朗さんとが出席した。清瀬さんが、「自然に書くと五音音階になる」、と言つた。これに対し、柴田さんが、「それは私たちにとって驚異です」と答えていた。これは、当時、更に若い世代であつた私たちの間でも、いささかこっけいな話に聞こえた。民族性の感じ方が世代と時代により変動することの一例であつたらう。

私は、若い時心酔したバルトークの音楽が、自分本来のものともどうも違うことに気が付き始めたのが20歳台の後半くらいであつた。それから自分の探求が始まり、永い間創作の道は閉ざされた。バルトークの音楽の激しい不協和音がどうしても自分の中には無いのである。肝心なことは、ハンガリーにとって、ドイツ、オーストリアは敵であつた。これは決定的である。日本にとって西洋は敵ではなかつた。福田恒存が指摘したように中国もしかり。中国にとって西洋は敵であつた。日本にとって明治以来、西洋は敵ではなかつたではないか。西洋は日本人にとり敵ではなく

模範であり規範であり手本であった。作曲の仕事は、思想、理念と自分の実感の両方にまたがる広域の仕事である。若い時の私がバルトークに心酔していたのは、理念観念からであったろう。次第に覚醒してきた自身の感性が同調しないものであることが分ってきた。

司馬さんが説くように民族性もまた可変流動のものであるなら、ここで話はまた大きく変わってくる。民族音楽の専門家、小泉文夫さんは、「日本の作曲に文楽や民謡がちらりと出るような音楽が出てほしい」、と言った。私もまた同世代の朋友たちも同じ思いであったろう。しかし、この日本らしさ、というものが不動のものでないとなると、話はまた根底から変わってくる。私たちは明治以来 150 年、西洋音楽を取り入れてそれを消化することに専念してきた。作る側だけでなく、聞く人たちもまた西洋音楽の流れに囲まれ吸い込まれていた。私たちの感性はいまでは西洋音楽が他国のものといえないほど変わっているのではなかろうか。

小泉さんによると、世界には 60 以上の民族音楽があるそうだ。文化の数もまた同様であろう。しかし、現代のように、交通、通信が発達してくると、それぞれの文化はいやでも、交流、出会い、摩擦、競合、淘汰、の場に置かれる。その中で生存力の強い文化、伝播力の強い文化があり、同時に相対的に弱いものがある。いかに生命力が弱いものでも、希少な動植物と同様、固有の特性がかならずあるのだから、絶滅しないようまもるべきであろう。しかし、それはそうとしても、人の世界の物事は、完全に均等平等には出来ていないものである。強いもの、というより、ひろがりやすいもの、人が受け入れやすいもの、がある。一方で反対のものもある。昔、ローマ帝国の周辺の数々の国々は強いられなくともローマ風の建築をとり入れたそうである。便利で、コストが低くて、見た目がいいからである。いまのアメリカ文化に少し似ている。これは仕方がないことではなかろうか。私自身、バルトークはともかく、日本独特の音楽を何かの手法で実現したいと長年努力してきた。三和音は西洋渡来のものだから、そうでないものを求めて努力してきたが、どうしても手詰まりになる。三和音には倍音の原理にもとづく合理性があり、それはどこの人も受け入れるものを持ち、どこの人もその表現を必要とする感性を持っているのではないか。これは苦難の末に到達した認識である。

自分の特性、アイデンティティを顕示することは、他者を排撃することではなかろう。排他的になっては自らを貧しくするだけである。五音音階も、五度和声も、邦楽器の世界もいい。そしてまた、西洋音楽も世界の共有財産として遠慮なく使おう。私はいまそういう地点にいる。

(すけがわ・としゃ 本会代表理事)

## 座談会 『西洋近代文化史と日本』

出席：小宮 正安（ヨーロッパ文化史・芸術史：横浜国立大学准教授）  
高橋 通（本会 作曲部会長）／中島 洋一（本誌 編集長）

### なぜ近代史か？

**中島：**本日は、お忙しいところ、お集まりいただきまして有り難うございました。ところで、小宮さんは西洋文化史がご専門ですけど、主にオーストリアを中心に近代文化史を研究されている訳ですか？

**小宮：**なぜ近代かということですが、それは日本と関係があるからです。明治維新で新政府を開いた時、その時代に西洋にあった価値観は西洋ではもう無くなっているにも拘わらず、日本の中ではいまだに、澱のようにそれが根付いてしまっているところがあって、そういうことを研究して行くと、とても面白いですね。それに近代と現代は重なり合っており、近代を見ることで現代を知ることが出来ますから。

またオーストリア中心ということですが、オーストリアは多民族国家であり、現在のEUにまでつながる色んな見方が出来ます。その体制が時代遅れと言われてながら20世紀の頭まで持ち堪えちゃったというメカニズムが面白いし、そういう中で音楽、芸術などの文化振興策を国策として打ち出して行ったところは、研究対象としても大変興味深いところですよ。

**中島：**単一民族主義国家、多民族国家かという問題は、サラエボ問題などをみても、現代まで尾を引いているように見えますし、一方、EUの思想の中に、ヨーロッパ

## 音楽現代

2012年6月号 定価840円

- ♪特集＝やっぱり“生”（演奏）で聴きたかった名演奏家
- ♪特別追悼企画＝生涯を音楽に捧げたゲルハルト・ボッツセさん
- ♪アニヴァーサリーな音楽家たち  
～ヤン・ピーテルズゾーン・スヴェーリンク
- ♪カラー口絵
  - ・〔ローム・被災地支援コンサート〕  
読売日本交響楽団創立50周年記念事業
  - ・復興支援特別公演「きぼうの音楽会」 in いわき
  - ・日本演奏連盟「クラシック・フェスティバル」
  - ・神奈川県民ホール「タンホイザー」
  - ・オペラサロントナカイ「秘密の結婚」
- ♪インタビュー  
山田忍、荒井英治、中井正子 他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11  
TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL3861-2159

という大きな枠組のもと民族の違いを越えて連帯して行こうという、多民族主義の現代的発展形が見い出せるように思います。ところで、高橋さんも歴史がお好きなようですが。

**高橋：**高校の時から歴史は好きでした。しかし、その頃学んだのは受験用の歴史で、あまり考えることをせずに、単純に憶えればよかったです。色々な本を読んだり、議論したりしているうちに、それでは駄目だということが判って来ました。

また今、私は日本の音楽を勉強しているので、日本の音楽が出来上がって行く歴史的背景、特に文化史に興味があります。我々現代人が日本の伝統的なもの（音楽）と言っているのは、そう古い時代のものではないのです。我が国の文化は、外から入ってくるものを吸収する時代と、それを熟成させて行く時代が交互に訪れるのですが、現代を作っているのは、その前の時代の遺産です。我々日本人の基本になっている考え方は、江戸時代に出来上がった気がします。多くの人が伝統だと思っているものは、江戸時代の最後か明治に入った頃に出来たものなのです。

## 西洋近代と日本

**高橋：**明治維新の頃は、大国の中国でさえ西洋に侵略されつつあった状況の中で、当時の政治家は早く西洋諸国と対抗出来るだけの国力をつけなければならないということばかり考えており、文化のことなどに頭が廻らなかつたようです。しかも、悪いことに、当時政治をやっていた人達は、文化の中心にいた人たちではなく、薩摩、長州など日本の端にいた人たちですから、江戸文化の伝統などは分からず、そのため、それがいい加減に扱われた傾向があります。西洋に追いつけということで、西洋から色んなものが入って来ています。その頃の状況を引きずっているのが、いまの日本の価値観でしょう。先ほど小宮さんが、もうヨーロッパでは無くなっているものが日本にはまだ残っていると云われましたが、日本人には前のものを温めておいて、ずっと使うクセがありますから、、、だから古いものが残っているんじゃないですか？（笑い）

**中島：**いま、我が国が西洋から色々なものを吸収し、大きな影響を受けたということが話し合われましたが、近代という時代は、西洋が日本など東洋の国々に影響与えるだけでなく、西洋も東洋から何かを吸収しようとした時代でもあったと思います。それも、19世紀後半に流行ったジャポニズムに見られるような底の浅い異国趣味だけではなく、西洋近代思想に行き詰まりを感じた一部の知識人が、東洋の思想に興味を抱き、そこから学ぼうとするようなことも起こっています。例えば、フランスで東洋美術館を創設したエミール・ギメなどは、東洋の美術だけでなく、東洋の宗教、思想に深く興味を抱き、多くの東洋の思想書を集め、多くの仏像を収集しています。

それと、我々は、西洋文化の殆どが明治以降に入ったというような先入観を抱き勝ちですが、実際は江戸時代に、医学だけでなく他の分野の西洋の新知識がかなり入って来ていたようです。コペルニクスの「地動説」やニュートン力学なども吉宗の時代に入って来ており、江戸時代の優れた蘭学者たちに消化吸收されていたようです。

## キリスト教と文化

**中島**：ところで科学の話をしてきましたが、とにかく、誤解を招きやすいのが、キリスト教と科学の問題です。キリスト教と科学は対立するもののように思われ勝ちですが、キリスト教精神と科学的精神は対立するものではありません。

**小宮**：まったくその通りです。

**中島**：以下は私の強引な見解ですが、人間の原罪をとことん暴こうとする西洋のキリスト教精神、森羅万象をもたらす真理をとことん追及しようとする科学的精神、人間の欺瞞をとことん暴こうとする、リアリズムの精神は、表面的には対立関係にあるようにみえても、根元の深いところで繋がっていると思います。ただ、世俗的な権威としてのキリスト教団は、聖書の言葉を鵜呑みにし、科学と対立したり、弾圧したりすることがあります。従って教団が教育を牛耳ると、科学技術の発展の妨げになることがあったようです。ハプスブルク女帝マリア・テレジアが、教育をイエズス会から帝国の管理下に移したのは、賢い選択だったように思いますが如何ですか。

**小宮**：イエズス会は学校を作り、啓蒙主義とは対立して行くわけですけど、イエズス会の中の人間がすべて反科学的という訳ではなく、中には色々な人がおり、例えばアタナシウス・キルヒャーのような博物学的巨人もいます。彼の唱えた学説は、文脈では近代科学ではなかったけど、近代の自然科学の種を播いて行く訳です。ですから、実のところは、もっと混沌としていると思います。

**中島**：マリア・テレジアが教育をイエズス会から帝国に移したのは、彼女一人で考えたことではなく、夫のフランツ・ステファンのサポートがあったのでは、と考えているのですが。

**小宮**：ステファンのサポートがあったことは間違いないでしょう。ところで、折角ですから日本の宗教と教育の関係について伺ってみたいですね。



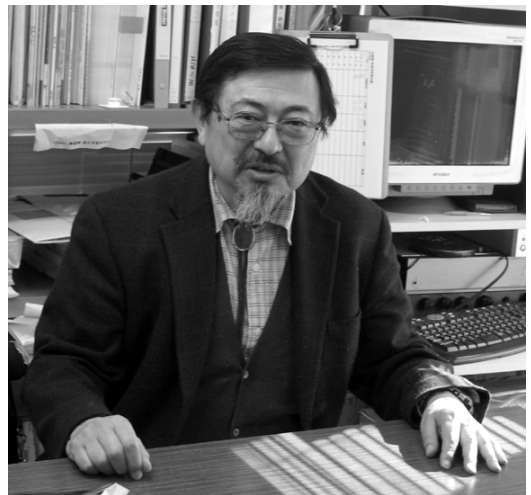
小宮 正安氏



**中島：**仏教は科学とは対立しませんね。儒学は江戸時代の教育（特に武士階級）においては最も強い影響力を持っていましたし、儒教が日本人の精神形成に与えた力は大きいのではないかと思います。武士道の高い倫理性はそこからもたらされたものだと思いますから。

ただ、儒学は自然科学とは相容なかったようで、儒学者の林羅山などは、地球儀を眺めていた信長より後の世代の学者でありながら、頑固に地球方形説に拘っていますし、「蛮社の獄」で高野長英、渡辺崋山など蘭学者を弾圧した鳥居耀蔵は林家の出身だそうです。どうも、儒学者と蘭学者は仲が悪かったようですね。

**高橋：**色々気になる話が出てきたので、言わせて頂きます。私は歴史が好きなので、歴史関係の本を色々読むのですが、最近面白かったのは「ローマ人の物語」です。著者の塩野七生さん自身、キリスト教に批判的なようですが、ヨーロッパ文化が今のようになったのは、キリスト教が入ったからだ。それ以前はもっと寛容で幅広い文化があった。ローマはもともと多民族国家で、他民族にローマのものを押しつけなかった。ところがキリスト教は、力で自分達のを押しつけようとしてきました。ハプスブルク帝国の末期のように、押さえつける力がなくなると、やむをえず、他宗教、他文化に対して許容的になります。西洋が強いのはキリスト教のせいでしょう。それに対して古い時代の中国、日本などは外からの影響を欲しがっており、人に押しつけるより先に外のものを受け入れようとしてきました。神道は原始的な多神教ですし、その後入った仏教も多神教です。ですから、一神教のキリスト教文化圏に比べ、外のものに対してより寛容だと思います。



高橋 通氏

また、宗教と科学の問題ですが、古い仏教には科学の五明と言われる分野がありました。自分達の思想を伝えるために科学を必要としたのです。しかし、仏教は次第に学問する宗教から、人を救済するためだけのものになっていった。最初は貴族階級、それからは民衆を救うために必要不可欠なものとなる。救われるためには、ただひたすら「南無阿弥陀仏」と唱えればよい。ですから、科学とは決別していったのです。

**小宮：**ヨーロッパといっても広いですから、多神教オンパレードのようなところもあり、みな一神教だったとは云えないんじゃないでしょうか？

**高橋：**ローマは初めの頃は、征服した地の方が自分達より文化程度が高かったので、色々なものを取り入れて多神教だった。しかし、ガリアなどを力で抑える場合、一神教の方が支配しやすいこともあり、一神教になって行きます。

**小宮**：それは。戦略であり、メンタリティーの問題はどうなのでしょう。同じ一神教でも、小アジアのものと、西ヨーロッパのものは、かなり違いますから。

**中島**：ご存知のように日本にもキリスト教が入って来ます。桃山時代から江戸時代になると禁教となり弾圧されますが、日本のクリスチャンは信仰心が厚く、あれほど多くの殉教者を出した事例は世界的にあまりないそうです。しかし、遠藤周作が語っていますが、日本の隠れクリスチャンは、みんなイエス教ではなくマリア教なのです。「サンタ・マルヤ（※隠れクリスチャンは聖母マリアのことをこう呼んだ）」です。

日本人には「恥」という意識はあっても、「原罪」という意識はありません。イエスは罰する神です。イエスのもとでは自分の罪を認め、懺悔しない限りは救われません。マリアは「赦す神、慈愛の神」です。日本の隠れクリスチャンたちが求めた神は、父なる神イエスではなく、母なる神マリアだったのです。確かに、ある宗教が入ることで、民族の精神や文化が変化するという面もあるでしょうが、民族、風土によって同じ宗教でも性格が変わってくるという面もあるのではないのでしょうか。仏教だって日本のものと、インドのものでは違っているかも知れませんが、宗教は人のメンタリティーの一番奥にあるものですから、もちろん各個人によって大きく異なるでしょうし。

## 革命の世紀

**中島**：小宮さんにメインパネラーをやっていただいた過去2回の「文化シンポジウム」では、ウィーンから西洋史を見てきた訳ですが、1789年のフランス革命、ナポレオン時代と、ウィーン会議、そして1830年、そして48年の革命と、18世紀末から19世紀の西洋史はフランスを軸に展開しているように見えますが。

**小宮**：日本では、近代史すなわち、フランス史というような誤った風潮が強いのではないのでしょうか。これは日本における「ヨーロッパ史」が、「フランス史」をそのまま受け入れてしまっているところに原因があるのですが。また1789年の革命のみが誇大に取り上げられ、1830年、48年の革命はあまり大きく扱われてはいませんが、1789年の革命はむしろローカルなもので、30年、48年と進むにつれ、ヨーロッパ中に広がって行ったと思います。

**高橋**：革命の中心になったのはどんな階層ですか？

**小宮**：確かに市民階級が中心でしょうが、市民階級と言っても色々な層から成り、日本人にはなかなか分かりづらい問題です。革命を指導した人達は、ある程度財力も知識もあった人達だったでしょうが、それを支えたのは、その日のパンにも困る下層の人達で、それは江戸の庶民などと比べてもずっと惨めな生活をしていた人達です。革命は最初から利害が異なる様々な層に分離した状態で始まり、分離は30

年革命、48年革命と進むに連れて、より、はっきりして行きます。1848年のフランス革命など巧く収まる筈がなかったのです。

**中島**：30年革命はブルジョワジーと中産階級が中心だったのでしょうか。シャルル10世は市民階級を怒らせるような、時代錯誤で反動的な政治を行いましたから。48年革命の担い手は、プロレタリアート、農民が中心だったのでしょうか。革命後、普通選挙が実施されますが、社会主義勢力は選挙に負けて、暴動を起こしたりして信用を失ったみたいですね。

それに比べて、メッテルニヒ体制は30年の7月革命によっても、大きな動揺はみせず、長く持ちこたえましたね。

**小宮**：メッテルニヒは非常に優秀な政治家ですからね。48年のウィーンの3月革命は最初の頃は一体化していたのですが、ブルジョワジーとプロレタリア階級に分離し、中産階級はブルジョワ側につき、革命勢力は消滅して行きます。

**高橋**：革命を支えたキーワードは何でしょうか。

**小宮**：それは新たな「普遍」でしょうか。それまではキリスト教が「普遍」だった。新しい「普遍」を創出した人々と、それまでの「普遍」を担っていた人々とは、階層も大きく異なりますが。

**中島**：「普遍」とは、具体的には共和制のことでしょうか？

**小宮**：ええ、1789年に火がつけられ、色々失敗を繰り返し多くの血を流し、出来上がるのに、100年近くかかりましたが。

**中島**：小宮さんは89年の革命はローカルなものだと、おっしゃいましたが、ナポレオンの進出は、ヨーロッパ中に革命思想を蒔き散らす役割も担っていませんか？

**小宮**：ナポレオンがというより、ナポレオンの存在が、そういう役割を果たしたと云えるでしょうね。

**中島**：新興市民階級の目には、私有財産の完全保証と、身分に関係なく能力があれば高い地位につけるという能力主義は、新しい時代の到来を告げる魅力的なものに映ったことでしょうか。

## パリとウィーンの大改造について

**中島**：48年革命の後の19世紀後半のことですが、ナポレオン三世と、フランツ・ヨーゼフによって、パリとウィーンは殆ど同時期に街の大改造をやっていますが、偶然ではないでしょうか。

**小宮**：偶然ではありません。この頃になるとヨーロッパの中心はパリとなり、ウィーンはパリを意識せざるをえなくなります。ですから、対抗意識からパリに負けじと、大改造を行ったのです。

しかし、パリとウィーンでは街の造り方に大きな違いがあります。パリの各地域は直線で結ばれていますが、ウィーンは、リンク（輪）で閉じられています。中心のリンクは中心街だが、もう一つあるリンクに行くと場末となります。

**中島**：リンクはもともと城壁があったところを道路に改造したのでしょうか。

**小宮**：ええ、でもパリなら城壁を貫く、ウィーンは城壁の構造が残る。それが大きな違いでしょう。パリの街は共和制の理念を示していますが、ウィーンにはドイツの地方都市に見られるリンク構造がそのまま残っています。

**高橋**：二つの都市の大改造は成功したと云えるのでしょうか？

**小宮**：何をもって成功とするか、評価が難しいところですが、どちらも近代都市として、公共性を前面に押し出すことができた点は成功と思います。ここで音楽が関わる話に移したいと思いますが、街が改造されたことで、オペラ座、楽友協会の新しいホールなどが出来、コンサートライフのあり方が根本的に変わって行きます。パリもそうですね、オペラ座が新設されたり、前からあったサル・プレイエルも改造されたりして、中流以上の多くの市民が、コンサートやオペラを楽しむようになります。もっとも、聴衆のあり方が変わったから、その要望に応えるように、街が改造されたとも云えますが。パリやウィーンが公共性を前面に打ち出した新しい都市のモデルを示したことで、他の街もそれを見倣うようになって行きます。

**中島**：フランスもオーストリアも文化行政には積極的で、パリでは、オペラ座やオペラコミック座など主な劇場は、政府から助成金の交付を受けていたようです。

**小宮**：19世紀後半は、市民文化が大きく花を開いて行く時代ともいえますが、高橋さんに伺いたいのですが、ヨーロッパの市民社会と、江戸の町人社会と共通点と相違点はなんなのでしょうか。

## ヨーロッパの市民文化と江戸の町人文化

**高橋**：先ほどの革命の話で、階層という言葉が出て来ましたが、江戸の町人社会では、ヨーロッパのようなはっきりした階層構造はないと思います。明治維新の革命もリードしたのは下級武士たちでしたし。

**中島**：武士の世を終わらせる革命を下級武士が中心になって進めたということですね。

私も日本史を研究して、「あらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である」という唯物史観の既定に疑問を抱いたのです。大塩平八郎の乱など、本来体制側である筈の与力だった大塩が、民衆側に立って乱を起こしています。勿論、そういう例ばかりではありませんが、倫理観や人と人との連帯のあり方が民族や地域によって差異があり、それが行動形態に違いをもたらすのでしょうか。

**高橋**：民族や地域が違っても時代によって似た状況が生まれてくる面もあるし、そういう中でそれぞれのあり方が違う面もある。そういうことを掘り下げないで、た

だ西洋のものを表面的に真似ても、浅くて実質の伴わないものになりやすい。明治維新後の西洋化には、そういう面がかなり強くあるような気がします。

それと日本の文化は、俳諧のように知識人が生んだ文化が、庶民に広がり川柳を生み出したり、農民の芸能である田楽が、武士階級が嗜む能楽に発展したりするなど、上層と下層の文化が相互に影響しあうところがあります。江戸時代に日本人の識字率が西洋諸国に比べてもとても高かったのは、農家の次男坊、三男坊や、貧しい生まれの子息でも、読み書きそろばんが出来れば、商家に奉公し、真面目に働くことで暖簾分け（のれんわけ）を受け、自分の店を持てる可能性があったからです。そのようなチャンスは同時代に生きた西洋のプロレタリアートと云われた人々には殆どなかったのではないのでしょうか。

勿論、江戸時代にも穢多（えた）、非人（ひにん）など、最下層に位置づけられた人達もおり、死人を葬る作業など普通の世界に入れないう戦国時代に敗者となった人々などあつたようですが、そういう階層の人々も、江戸幕府は割合上手に管理していたようです。

**中島：**江戸の町人にも、当然お金持ちもいれば、その日暮らしの人もいたでしょうが、どういう立場の人でもそれなりに娯楽もあつたようで、比較的高尚なものから、低俗なものまで、様々な文化が生まれ育っていますね。幕府も下層の民衆をまったく見放したわけではなく、八代将軍吉宗が開設した小石川療養所などは、下層の民のための無料の療養所だったわけです。江戸時代の世は町人階級にとって、それほど住みにくい世の中ではなかったと思います。

**高橋：**私もそう思います。

**小宮：**農村部はどうだったのでしょうか？

**中島：**江戸時代でも主たる租税は年貢だった訳で、そういう中で商品経済が発達すると、武士階級の出費も多くなり、各藩では特産物を開発するなど色々工夫はしたのですが、藩によっては、年貢が高くなり、農民の生活は苦しかったと思います。例えば、天明の大飢饉の時、津軽藩は大凶作に襲われ、米がまったく採れなかったのも、大豆だけは供出せず残しておきたいという農民の嘆願を無視し、藩は収入欲しさに、グルメブームで醤油を大量に生産するため大豆を必要としていた江戸に流してしまいます。その結果、津軽藩からは大勢の餓死者を出しています。そんなことが起こるようですから、たとえ外国の脅威がなかったとしても、経済活動力の乏しい武士階級が、いつまでも支配者であり続けることには、無理があつたのではないかと思います。

ところで、西洋の近代都市で、オペラやコンサートを楽しんだ人々は、少なくとも中流以上の市民で、プロレタリアートはその恩恵は被っていなかったのでしょうかね。

**小宮：**もちろん、そうです。

**中島**：洋の東西を問わず、いまでもクラシック音楽の愛好者の殆どは、知識層ですけどね。

## 国家主義、民族主義の昂りとその時代と芸術

**中島**：19世紀の後半は、個人の権利意識の高まりの延長線上で、民族、国家が自分達の権利を主張する時代になり、ハプスブルク帝国などの支配下にあった民族が自治権を主張して、支配から脱して行きます。子供の頃、音楽史で習った国民楽派などは、そういう民族の作曲家が生んだものですね。

**小宮**：「国民楽派」などという言い方がまだあるんですか？ヨーロッパではとっくにそんな言い方はしていません。今では、その時代の音楽は、みんなロマン派のカテゴリーで括っています。そういう言い方は、ドイツの人々が東欧や北欧の音楽家の作品を、自分達を中心という「上から目線」

でした言い方だと思います。そういう意味では、我々の国の音楽も、国民楽派ということになりますか（笑い）。

**中島**：確かに、「国民楽派」という言い方をする時には、ドイツ、フランス、イタリア以外の周辺国家、民族の音楽を表しますが、この時代は、国の大小を問わず、国家主義、民族主義の傾向が強くなった時代だと思います。19世紀後半にフランスでグレゴリオ聖歌が改めて採り入れられるようになるのも、フランス人が自己の民族性を強く意識してのことだったようですし、ワーグナーなどは、中世のドイツの伝説をもとに、作品を書いています。ただ、そういう音楽を、「国民楽派」の音楽とは呼びませんが。

その一方、ジャポニズムの流行にみられるように、遠い異国の文化にも興味を抱き、そういうものを取り入れようという風潮も強くなった時代でもあったと思います。国家主義と、国際化が同居していたのでしょね。また、国家主義は政治的には、自分達の国家民族の優越性を主張し、弱い国を食い物にして、自国の傘下に治めようとする時代でもあった。新植民地主義が蔓延った時代ですよ。

**高橋**：そういう世界的状況を背景に、我が国も西洋諸国の食い物にされてはいけない。早く西洋に追いつき追い越せと言うことで、西洋の技術、制度や学問をどんどん取り入れようとしたんですね。困ったことに、音楽においてもそうです。機能と声を取り入れたことで、日本の伝統音楽を壊してしまいました。もし、機能と声を取り入れたら、西洋の音楽を取り入れても、日本の伝統を損なってしまうようなことはなかったと思います。



中島 洋一氏

## 歴史から何を学ぶか

**中島：**でも、政府の要職にあった人達も、「ヨーロッパのものを真似ればいい」と、  
いうほど単純に考えていたわけではないんじゃないでしょうか。憲法なども、外国の  
憲法を真似てそれを焼き直して作れば、もっと早く出来たのではないかと思います。

大日本帝国憲法起草の中心人物であった伊藤博文が、1882年、ドイツ立憲主義の  
調査にドイツへ行った際、ドイツの憲法学者から「一国の憲法を制定するなら、ま  
ずその国の歴史を勉強せよ」というアドバイスを受けています。ですから、伊藤の  
周辺の人々も、自分達の国家、民族の実情に見合った憲法を作ろうという意識は強  
くあったと思います。しかし、その頃、すでに我が国では、自由民権運動家など  
によって、様々な憲法私案が作られており、それらは、伊藤達が構想していた憲法案  
より、より民衆の権利を強く認めた草案が多かったようです。しかし、そういうも  
のは為政者側に無視され、1889年（明治22年に）大日本帝国憲法が発布されるこ  
とになりますが、それが終戦まであった、旧憲法です。

ところで、我々はなぜ歴史を学のでしょうか。歴史は、「過去との対話」だとい  
う人もいますが、私は、歴史とは「今を写す鏡」だと思います。

**高橋：**「今を写す鏡」という表現は、とてもいいですね。私もそう思います。

**中島：**それと、クラシック音楽畑の演奏家は色々な、過去の作曲家の作品を演奏し  
ますが、そういう人達も、その時代の歴史と葛藤しながら生きていた人達です。ベ  
ートーヴェンのようにナポレオンに希望を抱き裏切られたり、ワーグナーのように  
革命運動に関わってしまったたり、ヴェルディのように国会議員になったりした人も  
います。彼等の創造の秘密を探るためにも、彼等がどのように生き、どのような活  
動をしていたかということについて、もっと興味を持って欲しいのです。そうした  
ら演奏も変わって来るのではないかと思います。

**小宮：**確かにクラシック音楽の演奏は、「お勉強」ということになりがちですね。

**中島：**今回は、私が喋り過ぎて、まことに申し訳ありませんでしたが、興味深い話  
題が多かったし、色々課題も見つかったと思います。文化シンポジウムの催は、こ  
れからも継続したいと思いますので、是非よろしくお願いします。

(2012年5月12日 日本音楽舞踊会議 事務所にて収録)

### 小宮正安（こみや・まさやす）プロフィール

ヨーロッパ文化史・ドイツ文学研究家。著書に『オーケストラの文明史 ヨーロッパ3000年の夢』（春秋社）、『モーツァルトを「造った」男 ケッヘルと同時代のウィーン』（講談社現代新書）、『愉悦の蒐集 ヴンダーカンマーの謎』（集英社新書）など多数。脚本家としては2006年に初演された『狂言風オペラ〈フィガロの結婚〉』を手がけ、同プロジェクトの〈魔笛〉は2010年ドイツ各地で上演され高評を博した（10月には日本公演も予定）。横浜国立大学教育人間科学部准教授として、後進の指導にも当たっている。

なお、2010年5月、2011年6月に本会主催で開催された、文化シンポジウム『西洋近代史と音楽家たち』で、メインパネラーを担当する。

音楽・人・書物

— 共振する出会いの中で —

これは！という楽曲に出合えるのはうれしい。「一本の鉛筆」—松山善三詞・佐藤勝曲—は、そんな一曲。第一回広島平和音楽祭（1974年8月9日）で、美空ひばりによって歌われたものだ。



「一本の鉛筆」を知ったのは、父からの電話である。芝田進午氏（哲学者・広島大学名誉教授）の主催する「平和コンサート」で初めてこの曲を聴いた父が、感動して電話をよこしたのだ。

1945年8月6日、アメリカが広島に投下した原子爆弾。その犠牲になった恋人への追慕、いのち、平和への願いがこめられた反戦歌だ。静かに心に染み入ってくる。

「あれはいい」と電話の向うで父は言った。それからほどなくして、父は心臓マヒであっけなく鬼籍に入った。

いのちのコンサート・「一本の鉛筆があれば」を、信州・松本の地で続けている。「一本の鉛筆」を芯にした平和コンサートだ。芝田進午氏の反核・平和への思いと、その実践にならって始めたもの

で、今年で10年になる。

「ちいさき いのちの ために」をプログラムに加えた。助川敏弥作曲のピアノ曲だ。この曲との出会いについても触れておきたい。

千田日記著「金沢蓄音器館のレコードコンサート」のことは、東京新聞（2012年4月27日）の人欄や、音楽現代（2012年5月号）の書評などで紹介されているので、ご存知の方もあられるかもしれない。

千田日記こと高山俊昭氏は、金沢大学名誉教授の古生物学者であるが、専門外の音楽への造詣これまた深く、その知識や感性とそのユニークさは、驚くばかりである。

類書の及ばぬ「音楽を通して社会問題を書く」その名調子を紹介するのは、私の手にあまるので、直接著作に触れてもらうしかないが、ピアノ曲「ちいさき いのちの ために」は、この本の中で見つけた。



猫ねこネコ！全曲猫がテーマのCD、「猫のシャンソン」をとりあげた一編があり、子猫の死を悼む一曲がその中にあ

ったのだ。子猫のためのレクイエム、「ちいさき いのちの ために」がそれである。＜助川敏弥作曲のこのレクイエムは、

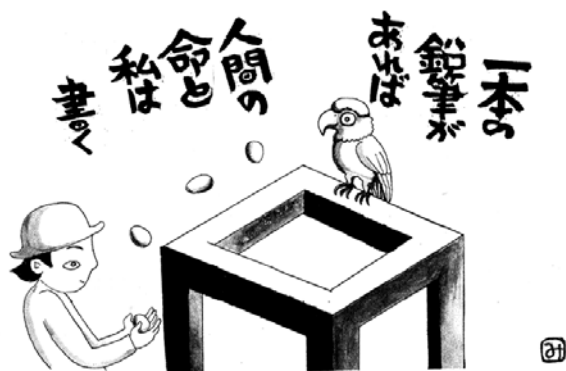


哀しくも美しい作品だ」とあった。この記述との出会いが「ちいさき いのちのために」と、私との偶然の出合いだった。

昨年の東日本大震災。続いての福島原発の爆発事故！結果、放射能で汚染された大地。その地域に取り残された犬や猫や牛や……。飢えてさまよい、あるいは屍を野に晒す。そんな様子を週刊誌の写真で見た。犠牲になったのは、人間だけではなかった。

その命たちを通して、もたらされた災厄を告発せねば！の思いにかられた。

「ちいさき いのちのために」は、交通事故の犠牲になった2匹の子猫を追悼するものであるが、愛するものとの死別は、いかなるかたちであれ、つらいもの。



レクイエム「ちいさき いのちのために」が静かに客席をつつんでゆく。はざまゆかの奏でる鍵盤から放たれる一音一音が、ちいさな命のしゃぼん玉として、聴衆の胸に届き、はじける。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

3分弱のこのレクイエムは、多くに愛され、編曲もされて、ヴァイオリンでも演奏されている。深沢亮子のピアノで録音され、猫好きのフジコ・ヘミングがステージで演奏することもあると聞く。

ともあれ「一本の鉛筆」との素敵な出会いから始った私の平和コンサート。

「ちいさき いのちのために」が、また一つ私に幸せな出会いをもたらしてくれたのだった。

今回、秋葉忠利前広島市長をゲストに迎えての講演が実現した。題して「一本の鉛筆と私」。核廃絶を目指しての寛容で多様なアプローチ、芸術家の果たす役割に期待する思いなど、内容は示唆に富むものであった。そして、秋葉氏との出会いのそもそも、その名著「真珠と桜」を手にした時に始まったのだった。そのことは、また次の機会に語りたい。

人生の節々に私が出会えたたくさんの方々に、小さなホールは一杯に。いのちのコンサート・「一本の鉛筆があれば」2012年5月12日(土)松本市音楽文化ホール。

「良かったよ！」声をかけてくれたのは、北海道から3日ばかりでかけつけられた中学時代の恩師、比企知子先生。音楽専科であった比企先生との出会いが、私にとって音楽をさらに身近に楽しいものにしてくれた。齢80を越えた先生を前にして、私ははるかに熱くそんなことどもを思い出すのであった。





## 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

### 〔第 29 回〕 ヒンデミット事件

映像とか文字によって誰にもわかるものならともかく、12の音を組み合わせた抽象的な音楽作品をとらえて、「これはわれわれの方針に合わない」などと国家が口を出す。そういう状況がやってきたとしたら、音楽家はどんな気持ちになるだろう？方向転換をして従わざるを得ないか、それとも活動を止めてしまうか。どちらにしてもやり難く、住みにくい世の中になったものだ、と嘆くのは間違いないだろう。



パウル・ヒンデミット (1895 - 1963)

音を扱うという特殊な世界にいるとはいえ、音楽家もまた時代とともに生きる旅人。時には権力者たちから睨まれ、その活動に口を挟まれることがあってもおかしくなく、実際にそうした例は音楽史にいくつもある。例えばシベリウスの交響詩「フィンランデ

シア」や、スクリャービンの「法悦の詩」、ショスタコーヴィチの「交響曲第5番」といった曲は、いずれも何らかの圧迫を受けたことで有名である。

今月ご紹介する「ヒンデミット事件」というのも、そうした一つ。音楽家をめぐる権力側との闘争としては、ショスタコーヴィチらソ連時代のロシアの作曲家たちや、何回かの挑戦にもかかわらず、「ローマ大賞」を獲れなかったラヴェル事件などとともに、音楽史上では必ず話題にされる有名なものである。

ヒンデミットとは、20世紀前半、2つの世界大戦を含む波乱の時代に活躍したドイツの作曲家、パウル・ヒンデミット (1895～1963) のことである。フランクフルト近郊ハーナウの出身だが、はじめヴァイオリニスト、のちにヴィオラ奏者として活動しながら作曲にも手を染め、第1次大戦後にロマン主義からの脱出を目指した新即物主義の音楽を推進。調性を否定した無調的な作風による独特の作品を書いて、同時代の作曲家に強い影響を与えた。それだけでなく、音楽は演奏する側に主体があると主張してそのための実用音楽、教育用・演奏団体用の作品なども書いた。作品の幅広さ、演奏・作曲の両面における多彩な活動など、ともかく20世紀最大の音楽家の一人といってよいだろう。

事件は、このヒンデミットが1934年に書いた交響曲「画家マチス」をめぐって起きた。ドイツではその前年にヒットラーによるナチスが政権を握ったが、独裁政治をめざす彼らは、文化芸術分野にも露骨に口を出し始めていた。根底にあるのはゲルマン民族の純血主義、ユダヤ人排斥の思想である。彼らはヒンデミットの革新的現代傾向を芸術の退廃であると決めつけ、ヒンデミットが当時組んでいた三重奏団のメンバー、フォイアマン（チェロ）とゴールドベルク（ヴァイオリン）がユダヤ人だったこと、および結婚した妻ゲルトルートがユダヤ人の孫だったことから秘かにヒンデミットを監視していた。

「画家マチス」は、もともとオペラとして計画されていたのだが、新作オペラの上演にはナチス当局の許可をとってから、という条件が付けられていた。ところがヒンデミット側では、オペラとは別に、この中の素材をもとにした3楽章の交響曲を書きあげ、オペラ上演の許可をとる前にこれを初演してしまったのである。その指揮を行なったのは、当時ドイツで最高といわれたウィルヘルム・フルトヴェングラー（1886～1954）であった。無断で演奏したことに

対してナチスは怒りを爆発させたが、しかしフルトヴェングラーは「なぜなのか？彼のどこが“非生産的”なのか？」と擁護する文を新聞に書き、反発からそれまで与えられていたあらゆる音楽上の要職を辞めてしまった。名指揮者エーリッヒ・クライバーも、彼に追随した。これがいわゆる「ヒンデミット事件」で、結局これがきっかけとなってヒンデミットはドイツを去り、スイス、ロンドン、トルコ、アメリカなどで活躍するようになったのである。亡くなったのはスイス、ブロナイというところであった。

一方、フルトヴェングラーはそのままだドイツ国内にとどまって演奏活動を続けたため、戦後ナチスに協力したとして裁判にかけられた。しかし結果は無罪で再び指揮活動へと戻り、ベルリン、ウィーンでの演奏を中心に、1952年にはベルリン・フィルの常任へと返り咲いた。亡くなったのは1954年、肺炎によってである。なお、「画家マチス」はフランスのアンリ・マチスではなく、16世紀ドイツのマチス・グリュネバルトのことである。農民戦争の際の農民側のリーダーだった人で、彼の絵をヒントにしたことも睨まれた原因だったらしい。

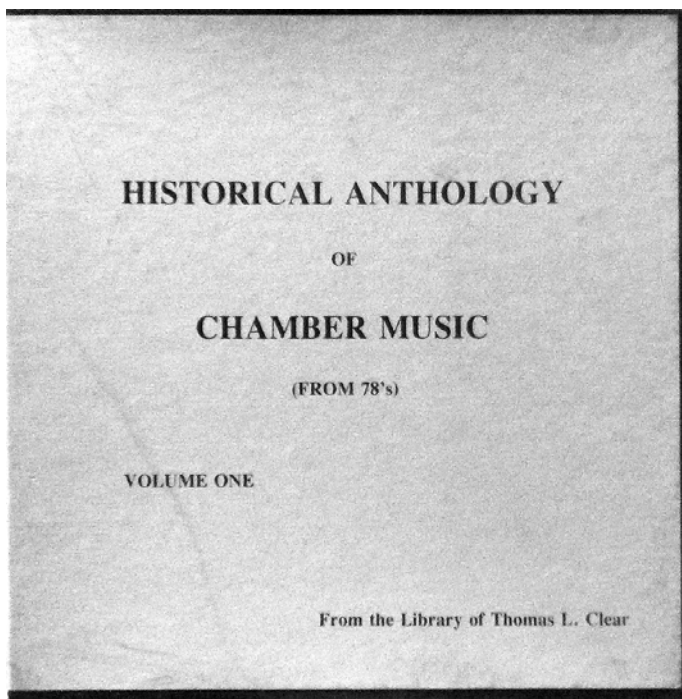
---

**【宮本英世氏プロフィール】**1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。



## ライオネル・ターティスのヴィオラ

去る4月7日、東京・春・音楽祭「ブラームスの室内楽」公演で、ブラームスのホルン三重奏曲のヴィオラ版という珍しい演奏を聴いた。これは、ブラームスが出版社の勧めに従ってホルン・パートをヴィオラで演奏できるようにしたものである。聴く前は、原曲でのホルンとヴァイオリンが対照的な音色（音触）で掛け合いをしたり、ユニゾンで張りあったりする面白さが効果半減になるのではと危惧していた。ところが、実際に接してみると、掛け合いやユニゾンが音色の似た弦楽器同士になることで、ホルン版とはまた別の、仲間内で協調するような親密な雰囲気生まれて実に楽しかった。ヴァイオリンの堀米ゆず子とヴィオラのロジャー・チェイスは、第2楽章と終楽章のユニゾンの部分で、ボウイングを完全に揃えていたので、見た目にも両楽器の“親密さ”が明らかだった。



彼らの演奏に接して、もう一つ興味をもったのが、チェイスが弾くヴィオラの大きさである。彼はかなり大柄で、プログラム前半のヴィオラ・ソナタではヴィオラの大きさが目立たなかったのだが、隣にヴァイオリンがあると、ヴィオラが目立って大きいのである。プログラムには「使用楽器は、伝説のヴィオリスト、ライオネル・ターティスが使っていたモンタニアーナ」とある。これは大きいサイズのヴィオラに違いないと思い、終演後のサイン会で直接質問してみた。すると「そう、胴が43cmある」とのこと。やはり、見

た目の印象は正しかった。更に、彼のバイオに私がLPレコードで愛聴しているヴァイオリニスト、スティーヴン・スターリクに師事とあったので、そのことを伝えると少々驚いた様子。ピーチャム指揮《シェヘラザード》、フィストラリー指揮《白鳥の湖》のソロが最高と続けたら、見る見る顔がほころんで「アンド・ピーチャムズ・ヘルデンレーベン!」。三重奏でのヴァイオリンとヴィオラほどではないが、ちょっと心が通じ合えたようで嬉しかった。

●ブラームス：ヴィオラ・ソナタ第1番

ライオネル・ターティス（ヴィオラ）／エセル・ホブディ（ピアノ）

[米 Thomas L. Clear TLC2581 (LP)] (写真 前ページ)

1975年に発売されたSP復刻盤。ライオネル・ターティス（1876～1975）はイギリスのヴィオラ奏者。ヒンデミットやプリムローズとともに、ヴィオラの独奏楽器としての地位向上に尽力した。この録音を含め、彼の殆ど全ての録音が英 Biddulph より CD化されている。



THE  
VIRTUOSO VIOLA

Benjamin • Enescu • Bach/Kodály • Jongen  
Vieuxtemps • Paganini • Kreisler • Shore

Roger Chase, Viola • Michiko Otaki, Piano



●ザ・ヴィルトゥオーゾ・ヴィオラ [ベンジャミン：ラヴェルの墓、エネスコ：演奏会用小品、ヴェータン：無伴奏ヴィオラのためのカプリッチョ、エレジー、パガニーニ：大ヴィオラのためのソナタ、ほか]

ロジャー・チェイス（ヴィオラ）

大滝美知子（ピアノ）

[香港 Naxos 8572293 (CD)]

2007年録音。（写真 左）

チェイス（1953～ ）はロンドン出身。短期間ターティスに学んでいる。

.....  
【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



-----  
**読者の皆様へ**

本誌では読者の皆様のご意見をお待ちしております。ご意見をお寄せになりたい方は最大1000字以内にまとめて、編集部へ郵送下さるか、下記のメールアドレス宛にお寄せ下さい。

メールの宛先（中島洋一編集長）： yoichi\_n@wa2. so-net. ne. jp

# 私と、ラジオ・ドラマ

連載第1回

作曲 助川 敏弥

少し前、自宅の部屋を片付けた。おびただしい数のカセット・テープが出てきた。かつて、自分がラジオ・ドラマの音楽を担当した放送の自家製録音テープである。いまの世の中すっかりテレビ時代で、放送ドラマといえばテレビ・ドラマを意味するのが普通である。しかし、テレビがなかった昔、放送ドラマといえば、当然ラジオ・ドラマを意味した。自分でカセットに保存したものは全体の仕事のごく一部である。若き日から壮年期にかけて、数えてみると私は、200本を越えるラジオ・ドラマを手がけていたこともあらためてわかった。カセットの中で特に大切な番組は高島和義さんに依頼してCDにしてもらったし、評論家の西耕一君が全部貰い受けてくれた。

1957年、学校を出ると私はすぐに作曲を職業として始めた。いま振り返ると、私にとって放送分野の仕事ではラジオの仕事が大部分である。映画は、記録映画、広報映画が10数本、テレビは、ドラマと記録番組をいれても余り多くはなかった。どういうわけか私は天性のラジオ人間であったようだ。先日、かつてNHKの名制作者だった竹内日出男さんと再会して歓談した。おおいになつかしく楽しかった。竹内さんは、1978年にNHKを退職して放送作家に転向した人である。いまでも、ラジオ・ドラマに熱意を持っていて、「オーディオ・ドラマ」という名称を創始してこの分野の継続振興につとめている。

仕事は、ほとんどがNHKであった。日本最古の放送局であり、歴史と経験が長く、見識と経験が深い職員が多くいた。経済的目的以上に得るものが多かったのがこの仕事である。わざわざカセットにとって保存したのも、それだけ自分にとって愛着ある仕事だったからで、ここで得たものは貴重な財産としていまも私の中に深く残っている。いまは過去となったこの時代のこの世界での経験を何かに書きとどめておきたいとかねてから願っていた。この経験を語ることは、話をひろげれば際限がなくなる。当時の作曲家の経済生活としての状況から、現場での仕事の進め方、出演してくれた演奏家の人たち、放送局側の進行の具合など、組織状況、放送職員

の列伝じみた思い出、等々、おびただしいことが思い出としてよみがえる。すこしずつ整理しながら書き記していくことにしたい。

私は、いまでも、NHKの西口、裏側、代々木八幡側を夜通る時、建物を見上げて、なつかしさの余り胸がせまる。かつて一緒に仕事をした、あの人、この人、職員の人たち、演奏者の人たち、写譜屋さんたち、いつも打ち合わせしていたあの窓ぎわ。私は俸給生活者ではなかったが、会社を定年で辞めた人たちの心情が共感されるのである。なつかしい場所というものは多々あるであろうが、しかし職場というのはまた特別ではないだろうか。

当時、ラジオ・ドラマの番組は定時番組で以下の通りであった。

「文芸劇場」、ラジオ第一放送、週一度。一時間ないし50分。

「FM芸術劇場」FM放送、週一度。45分。

学校放送番組。これは週何度あったか忘れた。短いもので15分。

これが当時の番組構成だったが、当時は、「ラジオ・ドラマ」とはいわず、「放送劇」と呼んでいた。いまではテレビもまた放送であるから、この名称は使えない。上の二つは、名前が示すように文芸ものである。ここで、著名な文学作品をとりあげ、音楽の方も遠慮なく高級な表現を使うことができた。大岡昇平の「俘虜記」では、私はプリペアド・ピアノを使った。異常な状態と、そこに置かれた人物の異常な心理を表現するためである。

さて、上の文芸もの二つは週一度、つまり月四回あるわけだが、毎回同一の作曲家が担当するわけではない。学校放送の短編をまじえて、月数回の仕事であった。一日に二本の録音をこなしたこともあった。同じNHKの建物の中だから造作ない。当時すでに映画音楽の全盛期は終わっていた。昔は、映画を一本担当すれば家が建つといわれた時代があったそうだが、もうその時代ではなかった。NHKは報酬は多額ではなかった。もちろん、そのほかに民放、映画では得られぬいい点があったが、経済はあくまで算術である。当時私は、門下生を複数教えていたし、その他、純音楽?の委嘱もちらほらあり、すべて取り混ぜて生活費としていた。税申告の分類によれば「雑」の中の「その他の収入」の寄せ集めである。この当時の文芸ものドラマの作曲はクラシックの人たちの仕事場であった。

(すけがわ・としや 本会代表理事)



## ～より豊かな音楽の未来をめざして～

2003年3月19日に新宿角筈区民会館ホールにて第1回の公演が行われて以来、『Fresh Concert』も今年で第10目の記念公演を迎えることになりました。昨年はコンサートが一ヶ月足らずに迫っていた3月11日に東日本大震災という未曾有の大災害に見舞われ、開催が危ぶまれましたが、今年は準備も順調に進み、10組14人の若い演奏家が世に送り出すことが出来ました。ピアノ伴奏者を含めると19人の方々が今回のコンサートのステージに立ちました。実は、プログラムでは11組15人の方々が名を連ねておりましたが、ピアノで参加する筈だった西尾自由梨さんが急患で出演出来なくなったため、出演者は一人減りました。

今年は第10回の記念公演に相応しく、選曲も多様で、演奏水準も例年に比べ優るも劣らない高い水準のものとなりました。

ただ、残念なことに、来場者が120名弱ということで、例年に比べ、かなり少なかったことです。しかも、そのうち4割ほどは、音楽雑誌『ぶらあぼ』の招待に応募した方々でした。出演者は自分の演奏に全力を注ぎ、お客様を呼び込むだけの余力がなかったのかもしれませんが、折角の熱演ですから、もっと多くの方々に聴いていただくように集客を頑張らないともったいないと思いました。

その代わり、来場者のマナーは例年になく良く、途中で席を立つ聴衆も殆ど見られず、殆どの方々がコンサートの最初から最後まで、若い人達の演奏に熱心に聴き入っていました。終演後20通ほどアンケートが集まりましたが、書いて下さった皆さんの評価はおしなべて好意的で、批判的または辛辣な回答は一通もありませんでした。お客さんの様子から、はつらつとした魅力的な音楽を聴かせてくれた巢立ちしたばかりの若い演奏家たちの将来の活躍を願い、暖かい声援で送り出してあげようという思いが伝わってくる気がしました。

なお、終演後、錦糸町駅近くのレストラン『北海道はでっかい道』で打ち上げを行いました。時間的に大分遅かったにもかかわらず、9名の出演者をはじめ、多くの会員が参加し、音楽談義に花を咲かせ、大いに盛り上がりました。

以下に、各演奏について実行委員長である私の寸評を記載します。個人的な感想ですので、気楽にお読みいただきたいと思います。

なお、演奏写真は、グラビアページに掲載されておりますので、そちらも併せてご覧ください。ようお願いします。

①原田 智代 (ソプラノ)  
ドビュッシー  
ドリーブ

ピアノ：神原 あゆみ  
『バンヴィルの7つの詩』から “夢想”、“雅な宴”  
“カディスの娘たち”



ドビュッシーの最初期の作品ながら、すでに若々しく新鮮な感性と、この作曲家特有の詩的な雰囲気をも漂わせた2つの歌曲“夢想”、“雅な宴”と、ビゼーの『カルメン』のジプシーの歌を思い起こさせるスペイン情緒溢れるドリーブの“カディスの娘たち”を歌い、性格の異なる二人の作曲家の作品を、見事に歌い分けていました。美しい発声としっかりとした詩の解釈に支えられた歌唱表現にはにより聴衆を魅了し、最初の演奏者として責務を見事に果たしていたと思います。さらなる要求をすると、ドビュッシーの歌曲において、P, PP の弱奏部分で、より陰翳を感じさせる表現が出来るとさらに表現力が増すだろうと思います。ドビュッシーの場合、高い音域で抑えた声を要求するため、それは、なかなか難しい要求なのですが。

## ②山上 由布子(ピアノ)

ショパン

2つのノクターン 作品 27-1、2

嬰ハ短調と変ニ長調（嬰ハ長調）で調性的にも音楽的にも明暗の対照をもつ、この2曲を、女性らしい繊細な神経が行き渡った丁寧な演奏で、なかなか魅力的なショパンを聴かせてくれました。大きな破綻もなく、よく弾き込んだ学習の成果がよく、表れていましたが、それだけでなく、この音楽を通して何かを訴えようとする演奏者の真摯な心が伝わって来て好感がもてました。

若い演奏者には高すぎる要求かも知れませんが、ショパンの作品は、一見旋律と分散和声だけに見える場合でも、内声に重要な動きが隠されていることが多いのですが、そういう作品の細部について、より深く研究し演奏すると、さらに作品の魅力が引き出せると思います。

## ③箕浦 綾乃 (ソプラノ)

バーンスタイン

ピアノ：永井 英里香

『キャンディード』より “きらびやかに着飾って”

この作品は、艶やかな声でたっぷり歌うところ、高度なコロラトゥーラの技術を必要とするところ、セリフが巧みに語れる俳優の演技力など、オペレッタやミュージカル歌手としてのすべての能力を要求していますが、本当に歌いたい曲を選んだという演奏者の拘りが伝わって来る演奏でした。憂鬱な気分を一掃するように、気分を変えて、速いテンポで軽快に陽気に歌う表情の転換は見事で、女の可愛らしさがにじみ出てくるような演奏だったと思います。舞台上のしぐさもなかなか堂に入ったもので、舞台向きの容姿と併せ、さらに芸を磨いて、オペレッタやミュージカルの舞台に是非挑戦して欲しい人と思います。

## ④城 佑里(ソプラノ)

チマラー

ベッリーニ

ピアノ：斎藤 亜都沙

「愛の神よ、ようこそ」

歌劇『清教徒』より “あなたの優しい声が”

この人の声は、中音域も豊かでリリック・ソプラノながら、ドラマチックな役もこなせそうな声を持っていました。最初に歌ったチマーラの「愛の神よ、ようこそ」は、この人にはうってつけの歌曲で、ボリューム感がある叙情的な表現を聴かせてくれました。次のベッリーニのアリアは、前半の変ホ長調の部分と、後半のアレグロモデラートの変イ長調の部分では、対照的に異なった表現を必要としています。前半はこの人の魅力がよく表れていましたが、後半では、特に高い音域において、少しキツイような感じもしました。

しかし、色々な役を幅広く来させそうな、豊かな声と表現力をもっているのも、さらに研鑽を積み、自分の長所を伸ばし、欠点を克服して行ければ、将来の大きな飛躍が期待できる人と思います。

### ⑤栗津 惇(ヴァイオリン)

イザイ

無伴奏バイオリンソナタ第3番 (バラード)

この人は今回のコンサートにおける唯一の弦楽器の参加者で、難曲のイザイの無伴奏バイオリンソナタ第3番を演奏しました。

この作品は、バッハの無伴奏バイオリンソナタと同様、重音による多声部書式で書かれ、高度な演奏技術を必要とするため、とかく楽譜通りに演奏するだけで精一杯で、無味乾燥な演奏になり勝ちなのですが、栗津氏の演奏は、音色が美しく音楽表現力も豊かで、説得力がありました。お客様からのアンケートでも、もっと長い時間、この人の音楽を聴いてみたかったという声がありました。

演奏に大きな破綻はありませんでしたが、若干音程面などで気になるところもありました。さらなる精進を重ね、自分の演奏の魅力に磨きをかけて欲しいと思います。

### ⑥高荒海(Tp. I) / 三嶋雪音(Tp. II) / 古田龍平(Horn)青木昂 (Tbn.) / 高橋秀和(Tuba)

トーマス

「ストリート ソング」

今回「ストリート ソング」を演奏した<Pensieri Brass Quintet>のメンバーは、同じメンバーで、様々な場で演奏しており、今回演奏した作品については、それほど多くの練習時間をとれなかったものと思われませんが、さすがにメンバーの意気が合っており、生き生きと澁刺なアンサンブルを聴かせてくれました。この作品は、CDなども手に入りにくい現代曲ですが、随所に各楽器の特殊奏法なども取り入れられ、聴かせどころがある作品ですが、そういう個所もしっかり演奏し、聴き映えのする音楽を奏でていました。

敢えて要求すると、強奏だけでなく弱奏も金管楽器の魅力で、楽器の高音域の弱奏は、音がひっくり返りやすく発音が難しいのですが、弱奏部分を魅力的に表現出来るようになると、真のプロのアンサンブルになると思います。

### ⑦柏木 沙友里 (ソプラノ) ピアノ：斎藤 亜都沙

自分が求める愛の姿をしつとりと歌う「トゥーレの王の歌」、思いがけぬ宝石の贈り物を手にとり、喜びで有頂天になって歌う「宝石の歌」、清純な乙女の愛のひたむきさと無邪気さを感じさせる、魅力的な演奏でした。この人は、声の質も、また容姿の面でも、マルガリータの役にピッタリと思えました。

欲を言うと、歌い方にまだ学習的な生真面目さが残り、マルガリータになりきっていない感じも少ししましたが、そういう面は、実際にこの役を貰い、舞台に立って全曲を演ずることで克服されて行くと思います。この人は日本人好みの清らかな声と歌唱力を持っており、将来がとても楽しみです。

### ⑧林 聡子 (ピアノ)

ラフマニノフ

コレッリの主題による変奏曲 作品 42

この作品は、なかなかの難曲ですが、ひたむきに練習を積み重ねた成果がよく表れた好演奏だったと思います。弱奏部分の繊細な音色感、強奏部分でのメリハリの利いたダイナミック表現の対比も見事で、演奏時間が長い曲ですが、聴いていて飽きが来るようなことはまったくありませんでした。敢えて注文すると、和声構造を支えるバスの音にもっと注意を払って欲しいと思います。特に構造的に複雑になり、演奏技術の面でも難しい個所ほど、しっかりした骨格の支えが要求されると思います。なお、今回は、時間の都合で、第 11、12、19 変奏はカットされました。

この演奏については、お客さんの評価も高かったのですが、それを自信にして、次はインタビューで語っていた古典派の作品にも挑戦してもらいたいと思います。

### ⑨三井 清夏 (ソプラノ)

ピアノ：岡本 知也

ヴェルディ 歌劇『椿姫』より “ああ、そはかの人か～花から花へ～”

この人は本日出演した他の 5 人の歌手より 2 年ほど先輩で、今春、二期会のマスターコースを修了しています。

さすがに、この日に歌った人の中では、声の豊かさ、表現力ともに、より成熟したものを感じた。また、この曲は本人にとって何度も歌った思い出の深い曲なのでしょう。様々な配慮がすみずみまで行き届き、聴き手の心に迫る表現を聴かせてくれました。殆どの音域において美しい声で、繊細でかつ豊かな歌を歌ってくれましたが、最高音域については、やや硬さが感じられました。その克服は今後の課題と思いますが、容姿の面でもビオレッタに相応しく、ビオレッタ役で舞台に立つ姿をみたいものです。

### ⑩小林 啓倫 (バリトン)

レーヴェ

“オルフ氏”

ピアノ：三品 萌莉絵

C. Loewe “Herr Oluf”



## 訃報 ディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ（バリトン）

20世紀最高峰のバリトン歌手とも謂われているディートリヒ・フィッシャー＝ディースカウ(1925年5月28日ベルリン生まれ)が5月18日に亡くなった。享年86才であった。

私が初めてフィッシャー・ディースカウを意識したのは、1963年ベルリンオペラとともに来日した時である。といっても、まだ貧乏学生だった私には高価な外国オペラのチケットを購入するなど夢のまた夢だった。当時、私の友達でオープン・テープレコーダを所有している男がいた。彼は自慢げにオープンテープに録音した現代音楽など様々なソースを聴かせてくれたが、その中におそらく、NHKで放送されたのを収録したものであろう、フィッシャー＝ディースカウが歌ったマーラーの『さすらう若者の歌』が入っていた。それを聴いて、「なんと美しい声だろう、なんと詩的な歌い方だろう」と大感激したことを憶えている。それまでは、私にとって後期ロマン派の音楽というとワーグナーが殆どだったが、それをキッカケにマーラーも聴くようになった。そして、私の書庫には、彼が歌ったLPがどんどん溜まっていった。

その中に、ベームが指揮し、フィッシャー＝ディースカウがタイトル・ロールを演じたアルバン・ベルクの歌劇『ヴォツェック』があった。彼は絶対音感がなかったらしいが、この難役をちゃんと歌っており、音大でソルフェージュも教えていた私にとって、絶対音感がなくとも、相対性音感さえしっかり磨けば、なんでも歌えるのだ、と学生を勇気づける格好の材料として使わせてもらった。彼は音楽、特に声楽を学ぶ学生にとっては、神様のような存在ではなかったかと思われる。そういうこともあってか、彼の演奏については声楽系の先生などを交え、よく議論の対象となった。「彼の演奏は、計算尽くしたものであり過ぎる。」と批判的な人もいたのである。彼の実績については、他でも広く紹介されているので、ここで触れる必要はなかろう。正に声楽界の「巨星墜つ」の感があり、寂しい限りである。

## 訃報 吉田秀和（音楽評論）

クラシック音楽評論の吉田秀和氏が5月22日に逝去された。氏は1913年9月23日生まれたから、享年98才である。この人の文章は幅広い素養を踏まえ、精緻に磨き上げられた拡張の高いもので読み応えがあったが、私は彼の語り口も好きだった。私の学生時代FMはまだ実験放送の時代だったが、その頃は古典から現代までクラシック音楽の番組が非常に豊富にあり、電気好きの友人にセットしてもらった、新しい自前のステレオ装置で、氏が司会する番組をしばしば聴いたものである。また氏は故齋藤秀雄、井口基成、柴田南雄などととも「子供のための音楽教室」開設し、初代室長となっている。古典音楽だけでなく、当時、最先端の現代音楽に至まで関心が深く、音楽専門誌『音楽芸術』の創設にも強く関わっていた。しかし、氏の文章や話しから、時折、当時の前衛音楽に対する疑念、困惑も伺えるように感じたことがあった。文化勲章受章など数々の榮譽に包まれた人だったが、同年配の友人達が次々と物故して行くのをどのような気持ちで見送ったのであろうか。私にとっては雲の上の人で、直接面識はなかったが、戦後の我が国の音楽界をリードした大きな人がとうとう舞台から去って行ってしまった。氏が戦後の音楽評論界の巨星のような存在だったことは、多くの人々が認めるところであろう。

(以上2点 文責 編集長 中島洋一)

これまでに生まれた作品、集った作曲家・演奏家・観客・関係者の数は計り知れない。ひとつの歩みを50年続けることの素晴らしさよ！ 半世紀に及ぶ歴史を営んできた日本音楽舞踊会議へ、心よりの祝辞を捧げたい。

記念すべき公演に出品したのは、8人の作曲家。性別も経歴も編成も様々であった。まずは2009年より作曲部会長を務めたが昨年急逝した大和實の《大和ミエ子詩謡集「さくら さくら」》より「こぶしの花」、「冬の鳥」、「榛名賛歌」が、大和の生前に細かなレッスンも受けた M. Sop. 湯川亜也子、Pf. 森田真帆により真摯に、そして追悼の意も込めて演奏された。素直な気持ちで聴ける温かさは、大和の人柄も思い出される。

以下はすべて初演か、改訂初演であったが、曲解説で触れているものを除いて作曲完成年が分からないのが少し気になった。

高橋通《ピアノソナタ》は4つの部分からなる単一楽章。バルトーク、スクリャービン等を想起するモノクロームに、強い意志が見え隠れする。中間部で浮き上がる旋律など要素を弾きわけて構造を際立たせた Pf. 鈴木菜穂子も見事。

津田裕子《ヘスペリデスの庭》はギリシャ神話の精霊ヘスペリデスの物語から発想された2つの組曲「ヘスペリデスの泉」「ヘスペリデスの園」からなる。Fl.1 吉崎恭佳、Fl.2 池田若菜、pf. 宮入柚子という不思議な編成だが、作曲者解説によると Fl が2人であるのは、人間が常に1人ではないことを示唆するためと記載あり。映像や物語のBGMとして聴けば納得行く部分もあるが、殆ど Fl ソロもなく、ユニゾンの扱いが多く流れが停滞したのは、物語設定を意識しすぎたのではなかろうか。物語より自己の音感性を大切にしたい。

桑原洋明《ピアノ三重奏「ある内なる対話」》はリズムオスティナートを形成しながら三楽器の諧謔的なアレグロとピツィカートが特徴的素材として全体を統制する。Vn. 坂本瑠美、Vc. 伊藤顕輔、Pf. すずきみゆきへ技巧の応酬を要求して、延々と問いかけを続ける。ある意味でショスタコーヴィチを思わせる狭い音域への固執やいつまでも答えの出ないような持続は内的対話と言えるかもしれない。

金藤豊《ヴァイオリンソナタ第5番》は Vn. 北川靖子の美しい音色と Pf. 高橋健介の的確なサポートによる改訂初演。ソナタ形式を意識した第1楽章、亡き友に捧ぐ第2楽章、バッハの引用による第3楽章、日本的音感が随所に聴こえた。

Sop. 浦富美、作曲者ピアノ演奏による島筒英夫《防人の歌》(作詩:高橋一仁)は、第一首「おそろしや」、第二首「ふるさとよ」、第三首「いきのしま」より、第四首「ねんきおえ」、第五首「としおいた」、第六首「いつのよか」からなる。メシアンを思わせるような響きも混じえて人間の奥底へ投射する。浦の歌唱は防人の心情だけでなく詩人や作曲者の心も伝える。

穴原雅巳《弦楽四重奏のためのレクイエム》は1997年、黒髪芳光に師事していた頃の作曲で、題名もなかったが、黒髪の十周忌、東日本震災などが重なり、逝けるものへのレクイエムとしたと解説にある。聖歌の変奏、或いは唱歌を思わせる相当に習作的な曲である。それを敢えて出品したのは師や逝ける者へのある意味では極私的な鎮魂の祈りであろうが、現時点の自分の視点を以って改作すべきだったのではないか。Vn. 1 西田和子、Vn. 2 湯山怜史、Va. 宮本美喜、Vc. 安東和美のメンバーも幾分アーティキュレーションで悩んだように聴こえる演奏であった。

50周年記念を締めくくるのはロクリアン正岡である。当初予定された《バリトンサクソフォーン独奏曲「ライオンへの畏敬」》は演奏されず、《サクソフォーン八重奏曲「来音=ライオン」》と正岡のピアノソロ自作自演《ヨワンロクリアンバッハデス》という演目。まずは《来音》から。サクソ8人のぶ厚い響きは重戦車の如き迫力で一片の色気も感じさせずに突き進む。音によって誇示される男性そのものというべきか、そのエネルギーとダイナミズムに圧倒された。各パートのソロもバランス良い。獅子の咆哮を模した響きもあったが、例えばスペクトル分析で忠実に再現することもできたであろうが、それをしない武骨さも男らしい。小串俊寿指揮の東京音楽大学サクソフォーン・アンサンブルは、若さに宿るデモーニッシュを膨張させ、巨大なる魂を音で現出させた。その後は、ピアノソロ。バッハを正岡流に再構築した曲であったが、両手から全身に全霊を込めて震わせ、頭をミサイルの如く空中に突き刺す演奏姿、これもまた男性そのもの。記念に相応しい拮がりのある夕べであった。50年後の100周年にはどのような会が行われるのだろうか、楽しみである。

(にし・こういち 音楽評論家)

# 《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

## 第六回 今井重幸 舞踊に魅せられた作曲家が育てた、異色の舞踊家列伝(4)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

六回目は、作曲家「今井重幸」として、現代舞台芸術の企画演出者「まんじ敏幸」として、長く舞台・舞踊界に関わってこられた今井重幸氏に、対談形式でお話を伺いたと思います。

### ■今井 重幸/まんじ敏幸

#### (作曲家、指揮者、舞台芸術企画・演出者)

1933年生まれ。1945年より独学で作曲を初め、交響詩「狂人の幻影」が縁となり、伊福部昭に入門。のち米国でエドガー・ヴァーレーズに師事。1953年NHKテレビの開局にともない、影絵・人形劇の制作スタッフとして参加し、「蜘蛛の糸」「杜子春」「走れメロス」などの教養番組音楽を作曲。映画では前田憲二監督、亀井文夫監督、手塚陽監督らの音楽を担当。舞台では東京芸術座、ソシエテ・デザール、青俳、文学座、人間座、薔薇座、アルス・ノーヴァなどの劇団に楽曲を提供。

また、まんじ敏幸の名で舞台演出家としても活動し、1956年、舞台に関連する若い芸術家たちとともに「現代舞台芸術協会」を設立、企画と演出を担当。ヨネヤマ・ママコ（ダンス・マイム）、土方巽（舞踏—今井は土方の芸名の命名者であり、「舞踏」のジャンル名も今井による）、三条万里子（モダンダンス）、小松原庸子（スペイン舞踊）、長嶺ヤス子（フラメンコ舞踊）らを世に送り出す。

現代舞台芸術協会理事長、日本フラメンコ協会理事、東京造形大学造形学部・舞台芸術専攻元講師、日本大学生産工学部・建築工学科元講師。



(写真：小島竜生)

#### ■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。



### ■才能邂逅点・・・1958年の群像■

音楽家・舞踊・芝居等、舞台人として生きる魅力の一つに、多くの場合短期間のうちに、それまで顔を合わせた事のなかった者同士がプロデューサーの依頼のもとに集まり、本番舞台という共通の目標に向けて才能を発揮することではなかろうか。時に将来の逸材が其れと気がつかず、一つの舞台で邂逅する事がある。

今井重幸の場合、その長い舞台人としてのキャリアの中、1950年代、10代後半から20代の初期の頃に第一段階の大きな才能合流点があったようである。これまで概論(月刊「音楽の世界」2012年1月号)、ヨネヤマ・ママコ(同2月号)、そして土方巽(同3月号)の順に、今井が育ててきた才能とその後の人生を追ってきた。それは才能は才能を呼ぶことである。人のつながりから生まれる舞台、才能の連鎖から生じる時代というものは、時



代や環境は違えど、若い芸術家にとって人が才能がどのように惹かれ合い、一つの舞台を作るに至るかという一つの示唆になるのではないだろうか。ここで『ハンチキキ(1958年)』という作品を通じ、今井自身の述懐や当時の資料を読みながら見てみたい。

## ■現代舞台芸術協会と『ハンチキキ』

今井が1955年、舞台に関わる各ジャンルの意欲的な若い芸術家を結集して創設した「現代舞台芸術協会」が、その旗揚げ公演として開催した1958年の舞台に企画制作し構成・演出した二つの作品は、画期的な出来事であった。

その一つ、東アジアの北端のアイヌ民族の神話に想を得た『ハンチキキ』。今井はその作品で、第二次世界大戦後日本に於いて活気を取り戻し始めた現代舞踊の世界で、其々の流派が独自の創作法を模索して居た時代、江口・宮舞踊団、高田せい子舞踊団、檜健次舞踊団、津田信敏舞踊団、青年バレエ団等の新進気鋭の若手ダンサー達に横断的に声を掛け、主役にこそ今井がダンス・マイムのダンサーとして育てたヨネヤマ・ママコを据えたが、他の舞踊手達にも独自の主張をさせながら纏めると云う、活気的かつユニークな作品であった。

もう一つは、土方巽（ひじかた・たつみ 1928年-1986年）に、本名である九日生（くにお）から「巽」と云う芸名を与え、そして「暗黒舞踏」その後は「舞踏」という新しいダンスのジャンル名を与えてアバン・ギャルドの思想に立脚した新しい身体表現の方向性を示唆した『埴輪の舞』（詳細／月刊「音楽の世界」2012年3月号）という作品なのである。

ハンチキキは最初、『劇団人間座・現代舞台芸術協会共同公演』の提携公演（1958年）で初演され、後に「現代舞台芸術協会」第一回公演（1959年6月）でも再演されている。今井が呼び集めたこの舞台の関係者は、共演者をはじめ、キャスト、スタッフ、のち各分野での大御所となる錚々たるメンバーで構成されている。

### バレエ・パントマイム「ハンチキキ」

（『劇団人間座・現代舞台芸術協会提携公演（1958年12月）』より）

劇団人間座代表／江田和雄 現代舞台芸術協会代表／今井重幸

（台本／作曲）原田甫（構成演出）今井重幸  
（振り付け）ヨネヤマ・ママコ（美術）朝倉撰  
（衣装）木塚千枝子（照明）野尻ひろし（舞台監督）駒形俊一  
（指揮）岩城宏之（演奏）SASC管弦楽団



共同公演プログラム写真

### 【キャスト】

（雀）ヨネヤマ・ママコ（烏）関矢幸雄（梟）大野一雄（鶴）西田堯  
（鷗 [しぎ]）土方巽（啄木）若松美黄

「動物神（群舞）」

堀口昌徳／砂川啓介／庄司 裕／福本正孝／剣身 慎／松井 晃／矢部 剛／片桐 純／  
菊池朝行／小谷正道／堤 世王己／三条万里子／大島抽江／池田千恵子／城 きよみ  
大坪初枝／竹内道子

上記が当時のプログラムから写したキャストの一部であるが、主演の6名はもちろん、「動物神」という群舞にも、後に著名となる舞踊家の名前を見る事が出来る。また日本画を学びつつも舞台美術へと歩み始めた朝倉摂の、実質上の舞台美術デビュー作でもあった。

■「ハンチキキ」のプログラムに寄せられた、金田一京助、土方巽、二つの証言

また、解説にアイヌ学つながりで金田一京助（1882年-1971年／言語学者、民俗学者。アイヌ語の研究で知られている。石川啄木と親交があった。）が寄稿しており、土方巽も金田一と会った思い出をプログラムノートに記載している。これは今井と共に土方をはじめ数人が金田一の家を訪問し、そこでアイヌについてのお話や御意見を伺い、沢山の資料を見せて頂いた縁であろう。金田一の言葉はそのまま『ハンチキキ』の舞台の内容解説でもあり、今となっては貴重な資料であるので、ここに全文を引用する。（原文ママ。改行は橋川による。）

『アイヌの神謡、雀の酒盛りの一曲、ハンチキキ（雀の啼声の擬音語）と謠い出される小篇が、音楽専門家の感興をそそって、こん度、作曲されたということである。

音楽のことに、何の素養もない私には、どういふことになるものか、見当も付かないけれど、あの歌は、意味がさっぱりしていて、至って無邪気で天真であるから、音楽に却って気に入ったということに、何だか私もうなづけるし、やって来る鳥が違えば、リフレンが一々違って、どうもその鳥の啼声—それもちょっと変った音群で変化するものだから、アイヌの娘が歌うのを聞いてもちょっと楽しかった。大事な、複雑な組織の西洋音楽に鍛え上げられたら、それはまた、どういふ響きを持ってくる事であろ—かと楽しみである。

またこの話を舞踊劇化するそうで、私の書齋に現われてはいろいろと資料を漁って行く若い人たちの行為と心情には大変私も動かされました。この淡いアイヌのお話が本当に楽しく無邪気で人の気持ちを解ぐすような作品になってくれることを門外漢の私ですがお望みします。御成功をお祈りしましょう。

（金田一京助）』



金田一京助  
(1882-1971)

写真：wikipedia より

文中に出て来る「若い人たち」の一人であった土方巽が『帰って眠れなかったほど感動した』という、金田一邸を訪問した思い出を同プログラムノートで記している。後の「暗黒舞踏／舞踏」の創始者、舞踏神・土方巽の目から見た金田一京助の姿も興味深い。

『明治のヒト、やっぱり私スキです。金田一博士の気配だと80より上です。静かなヒトもいるものだなと思いました。本当に静かなもの程よいにきまっています。僕疲れていることも本当だけれど、これから先もなんぎなことばかりあるにきまっていますので疲れるのでしょう。』

書齋でアイヌのしゃしんや絵本をタクサン見せてもらった。アイヌのことにふれて始終博士は熱中し静かに泣きマス。泣くのだからな、スキだからです。僕は感動しました。やしきを出て坂の所でうしろを見ると、金田一邸は雨でけむっていました。（土方巽）』

---

---（橘川）ここまで舞踊が盛んになったこの時代の文化的、社会的背景はどのような感じだったのでしょうか？またその中でも、舞踊と音楽をテーマにしていた今井先生に、この1958年の邂逅点に至るまでの大きな転機等はあったのでしょうか？

（今井）「戦争中、政府が文化活動を抑制していた。自由な表現ができず、行動が監視されていたんです。江口さんたちも、慰問隊で動員されて慰問活動をさせられ、苦勞していました。そもそもこういった芸術・芸能の慰問の歴史は、『支那事変(1937年)』以降、中国大陸に派遣された兵士を慰問するために結成した演芸派遣団、慰問団の流れかもしれません。

1945年以降、突然文化・芸術が自由になり、舞踊団が、それまでの抑圧のギャップから盛んに活動するようになった。特に1947年から1960年くらいまで舞踊が盛んだった。舞踊といっても当時はバレエよりモダンダンスの創作活動が盛んだった。その時期に『プロメテの火(1950年)』が大ヒットした。その内、『プロメテの火』が日本全国を巡業して、地方公演で出るようになったり。川端康成が観て感動し、朝日新聞の連載小説『舞姫(1951年刊)』に登場させた程、その時代で大きな話題になった。ぼく自身も『プロメテの火』の初演を見て、舞踊、そして音楽に感動して、その作曲者、伊福部昭(1914年-2006年)先生のことを意識するようになり、後に弟子入りをしました。」

---

なお、このハンチキキの台本・作曲の原田甫は北海道の出身で、伊福部昭門下である。当時作曲家として発表の場を探していた原田に、同門の今井が声をかけたのがきっかけとなった。この舞台のテーマを原田が探していた時、原田自身のアイデンティティを今井が問いかけ、そこから北海道、アイヌ、そしてハンチキキへとつながり、作品として結実した。

一つの舞台明かりのもとには、多くの邂逅がある。1958年の群像は、様々な才能の連鎖を見せつつ、後の半世紀の様々な舞台に向けて輝きを放っていた。

（於：2012年4月7日 今井重幸邸にて）

# 福島日記 (10)

作曲 小西 徹郎



新入生も落ち着きははじめ学校に慣れてきた。各人とのコミュニケーションを可能な限りはかりながら、彼らの目標や進路を語り合い気がついたことはきちんと伝える、そんな日々である。今年は講義のコマ数も増えて学生たちとの時間も以前より多く取れるようになってきた。

今年の一年生はプロとしての準備がとてもよく進んでいる者が多くとても豊かな可能性を感じる。一人男子学生でとてもストイックに音楽に取り組んでいる者がいる。彼はとにかく1日1曲書く、ということ徹底している。彼は通学もできる範囲にしながらその時間を音楽に費やすために寮生活をしている。そして休憩時間はとにかく制作をしているのだ。以前私が作曲の受験講習会の際に先生から言われたこと、それは「三度のメシよりも作曲」だった。彼はそれを本当に実行している。だが、傍からみると身体を壊すのではないだろうか？気持ちが尖がりすぎて逆に創作に悪影響はないだろうか？そのようにも感じてしまいそこが心配である。だが、そんな彼も徐々に慣れてくると食事を採りながら余裕を持って音楽に取り組んでいくようになってきた。

学校に入学して実際に社会に出るまでは2年間しかない。しかも講義は丸々2年ではないのだ。その決まった時間の中でどこまで準備を進めていけるのか？ここが非常に重要だ。音楽を勉強するだけでなく自身の作った音楽がどこにどのような形で必要とされるのか？そのリサーチや届く先を見越して仕掛けていくことこのことが一番重要でそのために音楽以外の部分も多く勉強が必要になるのだ。



2年弱、この時間は非常に短く、内容が濃くあることがその先の音楽人生に大きく影響していくのだ。音楽は音楽だけではない、そのことをしっかり認識することがこの2年間を豊かにし、社会に出てからも大いに役立つのだ。

先日、何人かいる女子学生のうちシンガーソングライターを目指している者たちといろいろディスカッションをした。彼女たちの中に一人、とても光る感性を持っている子がいて今その学生をプロデュースしているところである。そしてもう一人、とても引っ込み思案な子がいて、とても真面目なのだけどどうしてもなかなか自分自身を認めることができない、自己評価が低いなのだ。そんな彼女をスタジオに呼びマンツーマンでディスカッシ

ョンをした。自分自身が嫌いで、なんとかしたくて常に迷っていることを告げられ私はいきなりダンスをするように言った。



常に考えすぎていることは行動を鈍らせてしまう。パフォーマーとしての立ち位置でもあるシンガーならばそこですぐにスイッチが入りダンスができなくてはならないだろう。その瞬発力をつけさせたい、そう思ったのだ。すると彼女は恥ずかしげに踊り始めたがスイッチは入っていない、つまり、楽しんでいないのだ。そこで私は一緒に踊り彼女

をのせながら笑ったり話しながら自らのスイッチを、音楽は楽しいという方向に入れさせたのだ。そしてスタジオでのブルースジャムセッションにも参加させた。まったくはじめてだというセッション、彼女はとても困惑していたので私がガイドボーカルをしながらチャレンジさせた。もちろんステップや身体を動かしながら、ダンスをしながらだ。

徐々にほぐれてきて彼女は本来の力の声に近づいてきた。そして最後にまた課題の曲を歌ってもらった。彼女はとても生き活きと非常に豊かな太い高音を響かせてアカペラでありながら素敵な歌声とパフォーマンスを私に披露してくれた。人間が本来の力を、またそこに近い力を発揮するためにはもちろん練習も大いに必要であるが、本番で一気にスイッチが入るか、入らないか？ここはとても重要で、一気にいつでもどこでもそれがコントロールできるようになるためにはスイッチが入った状態は、とても音楽が、パフォーマンスが楽しい、ということを身体が覚えていることが大事なのである。

音楽は音楽だけにとどまらない、前半に書いたことはこういうスイッチにもあてはまるだろう。踊るように音楽をし、奏でるように踊る、常に根っこは同じ場所にあるのだ。音楽は音楽だけに限らずトータルで見せていくこと、ここにどこまでこだわって、細かく演出することができるか？とても大切である。こういうことを学生にどんどん伝えていきたい。音楽が音楽だけに限らず、存在としてのアーティストを目指してほしい、そのためには人間力がとても大切である。

(こにし・てつろう 作曲会員)



# 会と会員の情報

## CMDJ 会と会員のスケジュール

### 6 月

- 2日(土)並木桂子・田中俊子共演－「原宿・午後のひととき～田園にそよぐ初夏の風」ベートーヴェン“田園”(連弾)、ドビュッシー“雨の庭”、“亜麻色の髪の乙女”(Vn. 印田千裕)【原宿アコ スタディオ、3,000円(小学生以下1,000円・問い合わせ先:080-3003-2102 並木)】
- 7日(木)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】
- 9日(土)芝田貞子・嶋田美佐子・高橋順子－「平和のためのコンサート」  
ゲスト:小森香子(詩人)・狭間壮(テノール)・はざまゆか(鍵盤ハーモニカ)講演「青い空は青いままで子どもらにつたえたい」他  
【牛込筆筈区民ホール 14:00～ 2200円】
- 12日(火)深沢亮子－朝日カルチャーセンター 共演:Vn. 中村静香さんと  
モーツァルト ピアノとヴァイオリンの為のソナタ K.454、ブラームス  
ヴァイオリンと ピアノの為のソナタ No.1【朝日カルチャーセンター  
13:00 問い合わせ:朝日カルチャーセンター03-3344-1945】
- 15日(金)北川暁子ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第  
7夜 第6番 第11番 第12番 第24番 第32番  
【津田ホール 19:00 一般5,000円、学生3,000円 問い合わせ:サウ  
ンドギャラリー 03-3351-4041】
- 22日(金)編集会議【19:00～ 会事務所】
- 24日(日)ピアノ部会試演会【10:00～13:00 新井宅(西荻窪)】
- 24日(日)千葉邦楽合奏団定期演奏会－高橋雅光作曲「独奏尺八のための悲」  
坂田誠山(尺八)清水フミヒト(舞踊)演奏【千葉市民会館 14:00】
- 25日(月)深沢亮子－翔の会 公開レッスン  
【トモノホール 10:00 問い合わせ:大山喬子 044-966-5224】

### 7 月

- 1日(日)高橋雅光－東京邦楽合奏団定期演奏会・高橋雅光作曲「早蕨の詩」ほか  
【日本橋劇場 14:00 開演】
- 7日(土)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】
- 7日(土)声楽部会コンサート「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」【すみだトリ  
フォニー 小ホール 14:00 2,500円】(詳細は裏表紙参照)
- 13日(金)ピアノ部会コンサート【東京オペラシティリサイタルホール 18:30 3,500  
円 学生2,500円】(詳細は裏表紙参照)
- 14日(土)深沢亮子－日生劇場ピロティコンサート 共演:永井公美子(Vn)植木昭  
雄(Vc)シューベルト:ソナチネNo.2、ソナタ「アルペジオーネ」、P  
トリオNo.1【14:00 日生劇場 問合せ Fax:F.シューベルトソサエティー  
03-5805-6318】
- 29日(日)深沢亮子－栗栖麻衣子さんとの連弾とソロ【熊谷文化創造館さくらめいと  
太陽のホール 15:00 開演予定 問い合わせ:武田 080-3310-4238】
- 29日(日)高橋雅光－日本尺八連盟埼玉支部定期演奏会・高橋雅光作曲「早蕨の詩」  
ほか【川越西文化会館「メルト」11:00 時開演】

8 月

- 7日(火)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
27日(月)滝澤三枝子ピアノリサイタル<情熱のスペイン>  
【板橋区立文化会館小ホール・午後6時30分開演 2500円】

9 月

- 7日(金)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
8日(土)深沢亮子ピアノリサイタル 共演:ウィーン弦楽三重奏団  
E. Sebestyén(Vn) H. Pascher (Vla) A. Skocic(Vc) 吉田聖也 (Cb)  
モーツァルト:ケーゲルシュタット・トリオ、ベートーヴェン:ピアノと  
チェロのためのソナタ No.4 シューベルト:ます 【14:00 浜離宮朝  
日ホール (お問い合わせ)新演奏家協会 03-3561-5012】  
9日(日)深沢亮子ー 東邦大学佐倉看護専門学校創立20周年記念祝賀会  
【オークラ千葉ホテル 16:00】  
11日(火)深沢亮子ー東浦亜希子 共演:松井利世子 (Vn)  
Schumann ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No.1 ほか  
【朝日カルチャーセンター新宿住友ビル7階 13:00  
問い合わせ Tel:03-3344-1945】  
21日(金)CMDJオペラコンサート2012  
【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】  
23日(日)深沢亮子ー 千葉音楽コンクール本選審査  
【問い合わせ:千葉音楽コンクール事務局 043-227-0055】

10 月

- 7日(日)広瀬美紀子ピアノリサイタル  
ベートーヴェン:ピアノソナタ第17番「テンペスト」・ピアソラ:  
(北條直彦編曲)「孤独」助川敏弥:夏のうた(初演)他  
【王子ホール(銀座) 14:00開演 3,500円】  
9日(火)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
15日(月)「様々な音の風景Ⅹ」~20世紀以降の音楽とその潮流~  
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

11 月

- 7日(水)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
18日(日)若い翼によるCMDJコンサート5【すみだトリフォニー小ホール】  
(詳細未定)  
19日(月)深沢亮子ー「翔の会」公開レッスン【10:00 コトブキD.I.センター  
問い合わせ:大山喬子 044-966-5224】  
27日(火)深沢亮子ー共演:上村文乃 (Cello)  
シューマン:アダージオとアレグロ 他  
【朝日カルチャーセンター新宿住友ビル7階 13:00  
問い合わせ Tel:03-3344-1945】  
30日(金)並木桂子ー 共演:岸洋子他 ピアノ デュオ ブリランテ X  
~名曲で巡るヨーロッパの旅  
アレンスキー:組曲第4番・ロッシーニ:ウィリアムテル序曲・グリーク:  
ペールギュントより、他 【杉並公会堂小ホール 3,500円(小学生以下  
1,000円) 問い合わせ先:080-3003-2102 並木)

12 月

4日(火) 深沢亮子とその仲間による “ピアノと室内楽の夕べ”

深沢亮子 (Pf.) 恵藤久美子 (Vln.) 安田謙一郎 (Vc.)

シューベルト : ワルツ Op. 18 (D. 145) No. 6 H-Dur、No. 2 h-moll

ブラームス : ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No. 1 G-Dur

助川敏弥 : Sunset for Violincello and Piano 初演(2011年作品)

モーツァルト : ピアノトリオ No. 5 K. 542 A-Dur

【音楽の友ホール 17:00 開演 入場料 4,500 円 (会員割引あり)】

7日(金) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】

15日(土) 室内楽コンサート—シューマン、ドヴォルザーク ピアノ 5重奏曲

Pf. 深沢亮子 Vn. 掛橋佑水、井上静香 Va. 中村静香 Vc. 宮坂拓志

主催 (財) 藤沢市芸術文化振興財団【湘南台文化センター市民シアター

16:00 (予定) 問い合わせ : 0466-28-1135】

2013 年

1 月

7日(土) 日本音楽舞踊会議 新年会【詳細未定】

25日(金) 声楽部会主催公演【すみだトリフォニー小ホール・詳細未定】

27日(日) 深沢亮子— 東金文化会館創立 25 周年記念コンサート

ソロと室内楽 共演 : Va. 中村静香、Vc. 上村文乃

【問い合わせ : 東金文化会館 0475-55-6211】

2 月

7日(木) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】

18日(月) 動き、舞踊、所作と音楽Ⅱ

【すみだトリフォニー小ホール 詳細「未定」】

4 月

5日(金) CMDJ フレッシュコンサート 2013 ~より豊かな音楽の未来をめざして~【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演 2,500 円】

《詳細企画中》

会員・賛助会員の皆様へ「スケジュール」へのお知らせとお願い

○上記スケジュール記載の本会主催事業 (ゴシック文字) には、会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。

○毎号掲載されるこの欄に会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。

○お知らせの際は、①〇月〇日 (曜日) ②会員名 ③催し物 (出版物) 名④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ ⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。



## 日本音楽舞踊会議 楽譜出版部からのお知らせ

楽譜出版部が出来て新しい出版を始めています。それに伴い、既に出版済の楽譜の在庫確認、価格改正を致しましたのでご報告します。(楽譜出版部長 高橋雅光)

### 日本音楽舞踊会議 発行中の楽譜

助川敏弥：KOMORIUTA 作品73 (1986年)

(東北地方に伝わる子守唄を主題としたピアノ曲) A4版9頁 1,260円

ピアノ曲集「ひえつきぶし」(2002年)(東北民謡を主題とした作品)

Lacrimosa「ちいさき たましいの ために」

四手連弾「風の遊び」

A4版19頁 1,680円

歌曲集「白く光れり」向山房枝詩(1996年)

(「ゆうやみ」「ゆらゆらと」「すずしさを」「ひさびさに」「つけしみに」)

A4版17頁 2,100円

歌曲集「ガラスの花束」立原えりか詩(1976年)

(「陽春」「光りの矢」「ムラサキイロの少年」「親指姫」「秋のままごと」)

A4版25頁 2,940円

歌曲集「夕顔」金子みすず詩(1999年)

(「夕顔」「土の草」「みそはぎ」「草原の夜」「だれがほんとを」)

A4版13頁 1,680円

高橋雅光：どんぐりっこのメロディー

宮田滋子詩による「おかあさんといっしょにうたう、あたらしい童謡曲集」

B5版27頁 2,100円

中島克磨：「モスクワ」ピアノのための詩曲 Poema"Moskva" for piano

A4版8頁 1,575円

木幡由美子：「トッカータ」ピアノのために "TOCCATA" for piano

A4版8頁 1,260円

北条直彦：「ピアノのためのヴィジョン」Vision for piano

A4版7頁 1,260円

黒髪芳光：「こどもの祭りⅡ」ピアノのための四手連弾曲集

(バイエル・メトードローズ併用)

A4版20頁 2,100円

小平時之助：歌曲集「北の国から」(「木地山ぼっこ」「ほしがき」他5曲)

A4版14頁 1,890円

金藤 豊：「ピアノのためのトッカータ」Toccata—interactive for piano

A4版16頁 1,890円

西山淑子：「金子みすゞの詩による童謡集」

A4版51頁 3,150円

\*お求めは日本音楽舞踊会議まで、郵便振替用紙にご注文の曲名をお書きの上ご送金ください。

日本音楽舞踊会議出版局

## 編集後記

5月21日の朝は天候が曇りと云うことで、あまり期待していませんでしたが、予想以上に天候に恵まれ、薄曇りの空を通して、見事な金環日食が観察できました。しかも、自宅の寝室に居ながらして、窓から眺めることが出来たのです。自宅付近は進路の真ん中に当たったためか、5分ほど、金環を見続けることが出来ました。こんな機会に恵まれるのは一生のうちでも最初で最後ですから、専用グラスを準備しておいて良かったと思いました。『音楽の世界』は前月が合併号だったため、その間、二つの大きなコンサートが開催されました。どちらも、演奏水準が高く、聴き応えのあるコンサートとなりました。これからは、いよいよ梅雨の季節に入ります。今年は天候が不順で、思いがけず雷や雹に見舞われることがよくあります。どうか、読者の皆様も健康に気を付けて頑張ってください。我々編集部も、より充実した紙面を目指して頑張ります。

(編集長：中島洋一)

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集部員：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋 通  
高橋雅光 戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

### 音楽の世界 6月号(通巻 539号)

2012年6月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: [onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

\* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします